慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	戦後沖縄イメージの探究
Sub Title	
Author	菅野, 聡美(Kanno, Satomi)
Publisher	慶應義塾大学法学部
Publication year	2008
Jtitle	慶應の政治学 政治思想 : 慶應義塾創立一五〇年記念法学部論文集 (2008.) ,p.87- 118
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Book
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=BA88454709-00000009-0087

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

戦後沖縄イメージの探究

菅野聡美

はじめに
一　占領軍のメディア政策と沖縄
二　本土の占領終結と沖縄情報
三　沖縄へ旅する人々
四　増大する沖縄報道と沖縄へのまなざし
おわりに

はじめに

日本本土が沖縄をどのように認識してきたか、そして、氾濫する様々な沖縄イメージの由来と機能とに関心を抱いてきた。戦争や基地といった重く暗い側面、政治的な観点のみで沖縄をとらえるのがナンセンスであることはいうまでもない。だが、歴史や現実に眼をつぶり楽園幻想に浸るのも、虚偽であり知的怠惰というものであろう。そもそも沖縄をめぐる言説は、なぜかくも「楽園」と「悲劇の島」とに引き裂かれているのだろうか。分断し並存する硬軟さまざまな沖縄イメージ成立の系譜と構造の解明を企図しながら、[1]道ははるか遠い。本論文では遠大な研究計画のささやかな一端として、敗戦後から本土復帰までの時期の沖縄をめぐる言説と社会現象を、従来同列に論じられることのない政治的言説と大衆娯楽を並列させて参照することによって、わずかながら解明しようとする試みである。

一　占領軍のメディア政策と沖縄

1　封じられた戦争被害

敗戦後の沖縄は、当初は日本国本土から切り離されただけでなく、アメリカのメディアも訪れることのない、報道上の空白地帯であった。占領軍が自国報道人に沖縄の自由視察を許可するのは一九四九年のことで、それまで沖縄は「忘れられた島」であった。人目の届かない沖縄において、「その軍紀は世界中の他の米駐屯軍のどれよりもわるく、その一万五千人の沖縄駐屯米軍部隊が絶対的貧困の中に暮している六十万人の住民を統治して来た。……沖縄は米国陸軍の才能のない者や除者の態のよい掃きだめになつていた[2]……米軍は占領中、時に日本が

したのよりも厳しく沖縄人を取扱つた。……米国のブルトーザーは沖縄人が一世紀以上も骨身を惜しまずにつくつた丘陵の畑をわずか数分間でふみつぶした」とされる。

米軍が沖縄へ上陸した一九四五年四月、ニミッツ布告（米海軍軍政府布告第一号）によって、沖縄は「日本帝国政府ノ総テノ行政権ノ行使ヲ停止」され米軍の支配下に入る。[3] これは対日戦争遂行上当然のことであったが、戦争終結後の一九四六年一月に、南西諸島は日本から分離されて占領が長期化する。

沖縄戦終結から占領初期は、アメリカにとっても沖縄の位置づけは明確でなく統治方針もないままであった。そのため先述のような事態となるのだが、マッカーサーの「沖縄人は日本人ではない」発言[4]に見られるように、日本と沖縄の分断化政策は当初からのことであり、一九四九年以降、アメリカが沖縄を「太平洋の要石」として重要視するにいたって、基地の拡大・恒久化が推進されることになる。

本土と沖縄が分断され、それぞれがアメリカの支配下にある状況では、沖縄の実態が本土に伝わることはほとんどなかった。また、伝えさせないようなメディア規制を米軍は行なっていたのである。まず日本本土における占領軍の言論政策の概要をみておこう。

米軍本土上陸時に創設された情報頒布部が、一九四五年九月に民間情報教育局（ＣＩＥ）となる。同月、民間検閲支隊（ＣＣＤ）も設置され、二つの機関がそれぞれプロパガンダと検閲を担当することによって、民主的思想を教化すると同時に、占領目的に適さない、あるいは占領にとって危険なもの、米国の利益に反する情報は封じられることになった。検閲の対象はメディアのみならず、民間の手紙や電信電話にも及ぶ。

そして、一九四五年九月一二日に、最初のメディア政策が発表された。それは、公共の秩序を乱すもの、日本が敗戦から新生するのに害を及ぼすようなもの、連合軍の動静についての虚偽報道、連合軍についての根本的批判や噂を禁ずるというもので、後のプレス・コードの原型といえる。[5] そして同月二二日にはプレス・コードが発

表された。本論に関係する禁止項目をあげると次のようになる。「連合国に対し、事実に反し、またはその利益に反する批判」、「連合国占領軍に対し、破壊的な批判を加えたり、同軍に対し、不信や、怨恨を招くような事項」、「編集上の意見」、「宣伝目的の記事の着色」、「過度の強調」[6]。つまり、許されるのは「事実」のみで、それに対して編集者の意見や解釈をもりこむことやプロパガンダが禁止されたのであった。

占領軍の統制は歌舞伎や映画など伝統芸能や大衆娯楽にも及ぶ[7]。ここでは後述する沖縄との関係を考える上で必要な、映画統制について簡単に述べておく。一九四五年九月二二日、ＣＩＥから、映画製作方針一〇項目と問題映画の条件が提示された。これにより、民主化を推進するものや平和国家日本の建設を描く作品の製作が奨励され、封建的な忠誠心や復讐を描くもの、軍国主義を鼓吹するものは排除されることになった。

一〇月になると映画検閲が開始された。まずＣＩＥが、映画の企画書と脚本の事前検閲を行ない、映画の完成後にも検閲を行なう。その後ＣＣＤの検閲が行なわれ、この二重の検閲をクリアして初めて映画の上映が認められる。ちなみにＣＣＤは一九四九年六月に映倫が設立されるまで続き、ＣＩＥの事後検閲は一九五二年四月まで続いた。また、戦前映画に対する規制も行なわれた。四五年一一月、「非民主主義的映画排除の指令に関する覚書」により一九三一年の満州事変以降に製作された二三六本の劇映画が上映禁止処分となった[8]。

また、ＣＩＥは一三項目の禁止令を出した。1、軍国主義を鼓吹するもの。2、仇討に関するもの。3、国家主義的なもの。4、愛国主義的ないし排外的なもの。5、歴史の事実を歪曲するもの。6、人種的または宗教的差別を是認したもの。7、封建的忠誠心または生命の軽視を好ましきこと、または名誉あることとしたもの。8、直接間接を問わず自殺を是認したもの。9、婦人に対する圧制又は婦人の堕落を取り扱ったり、これを是認したもの。10、残忍非道暴力を謳歌したもの。11、民主主義に反するもの。12、児童搾取を是認したもの。13、ポツダム宣言または連合軍総司令部の指令に反するもの[9]。

こうした規制により、戦争も米軍占領もその実相の映像化は困難をきわめた。広島・長崎の原爆被害をとりあげることはできず[10]、占領下で製作・公開された原爆映画『長崎の鐘』は、脚本から予告編にいたるまでＣＩＥに介入され、原爆による被害の映像は一切なく、夫婦愛を中心とするドラマとなった[11]。

占領軍への反感を避けるため、空襲による被害は、場面はもちろん台詞による表現すら禁じられた。また、占領軍兵士と日本女性との交際、米兵を父とする混血児は占領終結まで扱えなかった。当然沖縄戦を取り上げることもできない。事実『ひめゆりの塔』の企画は、一九五〇年七月にＣＩＥで審査されたが、許可されなかった[12]。

地続きの広島ですら占領終結まで映画化不能であった時代、そして本土との分断政策と情報統制によって、沖縄戦も沖縄の「現在」も本土には伝わらなかった。では、沖縄における統制はいかなるものだったのだろうか。

２　沖縄映画事情

沖縄の場合、本土のプレス・コードのような公式の規制基準は存在しなかったために検閲基準は曖昧であったが、すべては米軍の判断次第であり、基本的には本土と同様、占領目的に反するものや反米ないし反米軍的なものが禁じられた。明確な基準の提示は一九四九年発表の軍政府令第一号「刑法並びに訴訟手続き法典」であったが、要するに言論・出版・集会・結社の自由は、占領軍の意向で制限されるというものである[13]。

本土との交流については、一九四九年に本土沖縄間渡航の許可制が成立するが、当然許可が得られない人も出るわけで、一九六三年になっても本土への渡航拒否が二四件、本土から沖縄への渡航拒否が四九件発生している。また、本土沖縄間の無線電話開通は一九五三年であり、日本全国共通のメディアであるＮＨＫテレビ放送が、ＯＨＫとして開始されるのが離島で一九六七年、沖縄本島は六八年からである。つまり本土への情報発信も本土からの情報流入も、日本独立までは極めて限られていたということができる。

沖縄においては、映画の興行許可が出されるのが一九四七年四月であったが、本島には映画館など一つもなく、収容所をまわって上映する巡回映画が戦後当初の興行形態であった。四八年以降は映画上映劇場が続々オープンし、娯楽に乏しいこの時代、人々は映画に殺到した。この時期の上映作品の大多数は戦前の作品であり、しかも、離島や奄美、台湾経由の闇ルートで古いフィルムの買いつけが横行していた点が本土との違いである。[14]

もちろん米軍の意向に配慮したセレクトが行なわれたが、無許可の作品が上映されていたことは事実である。上映場所の増加に伴い闇フィルム上映もまた増加する。一九五〇年ともなると、闇ルートで戦後の新作邦画を買いつけて上映するようになる。

闇フィルム横行に悩んだ米軍政府映画演劇課は、アメリカ映画を一〇本配給したが、日米で大ヒットした『アメリカ交響楽』（A・リーバー監督）が極度の不入りで、上映三館のいずれもが、わずか二日で打ち切るという有様であった。沖縄の人々が求めていたのは「日本の」映画であったので、その後もアメリカ映画の名作が続々上映されるがいずれも不入りで、本土との観客の質の違いを感じさせる。

時代は大分あとになるが、一九六三年におそらく闇フィルムと思われる『明治天皇と日露戦争』が伊江島唯一の映画館で上映されていたという。大変な人気で、村中の老若男女が着飾って出かけ、日清・日露戦争に従軍した古老たちが軍帽や軍服を持ち出して映画館の入り口に陳列する騒ぎであった。[15]

とにかく「適切な」映画を供給する必要に迫られ、一九五〇年、主席軍政官セーファー大佐の命により、沖縄映画興行社長宮城嗣吉が軍用機で上京、松竹・東宝ら五社と正式契約し、翌五一年より正式ルートによる輸入映画上映がスタートした。そして同年、沖縄群島政府は映画フィルム審査条例を制定する。

かくして一九五一年以降は、本土の新作がほぼ同時期に沖縄でも公開されるようになり、沖縄の人々は「外国」にいながら日本本土の最新作を鑑賞していた。しかし、本格的な情報解禁は、講和条約により日本の占領が終結

するのを待たねばならなかった。

二　本土の占領終結と沖縄情報

1　「ひめゆり」映画の成功

一九五四年、ニューヨークの国際人権連盟議長ロジャー・N・ボールドウィンから日本の自由人権協会に手紙が送られた。それは、沖縄で米軍当局が一方的な土地の強制買収を行なっているとの報告があるので資料を送ってくれれば本国当局に交渉したいという内容であった。これを機に人権協会によって一〇カ月にわたる調査が行なわれた。その報告書をもとに、一九五五年一月一三日から『朝日新聞』の沖縄キャンペーンが始まる。

一月一三日『朝日新聞』社会面トップの「米軍の『沖縄民政』を衝く」は、沖縄の現状を広く本土に伝える役割を果たした。「日本本土の政府と国民は、沖縄問題に関知せず、アメリカの政府と国民もまた沖縄の具体的問題については無知であった。米陸軍省と米国民政府は外部の何らの制約を受けることなく沖縄を統治してきたのであった。ところが『朝日新聞報道』によって軍用地問題は本土の世論に訴えられ、もはや沖縄自体だけの問題ではなくなった。米国民政府の強硬政策のもとで萎縮していた沖縄住民はにわかに生気を取り戻したのである」[16]。

確かに米軍占領下という「沖縄の現在」については、五五年の『朝日新聞』報道が契機となっただろう。しかし、それに先立って、本土日本人に大々的に流布した沖縄情報があった。それは映画『ひめゆりの塔』である。当時日本映画史上最大の観客を動員した大ヒット映画『ひめゆりの塔』（今井正監督）の公開は一九五三年一月である。この映画によって一般の人々は初めて沖縄戦の実態を知ることになったのである。

本土占領が終結しGHQの規制から自由になると、禁じられていた戦争体験、とりわけ広島・長崎と沖縄戦が

映画の題材として選ばれることになり、映画界を戦争物が席捲することになった。[17]『ひめゆりの塔』人気の理由は、本土においても空襲によって民間人が多大な被害をこうむっていたため、共感を獲得しやすかったことが考えられる。また、沖縄を本土防衛の捨石にしたのは一般国民の意志ではなく、戦争でひどい目にあった「同じ被害者」として心置きなく感情移入が可能であったからである。

しかし、映画そのものに対する批判ではないが、「ひめゆり」の美談化に警鐘を鳴らす新川明の次の指摘には留意する必要がある。「祖国の為に何疑うこともなく死んでいった乙女たちの像を、問題として提出する側も、それを受ける一般の側も、案外安易なセンチメンタリズムの場のみで為していたのではなかったか。……それが可哀想な無智であるにしろ、彼女等が若し戦争に対する積極的な協力者であったとしたら、吾々は単に彼女等の可憐さのみを単純に美化して考えることは大きに危険なことだと思う。……確かに美しい犠牲者ではあった。だけどこの時、その美しい言葉のみに眩惑されることなく、吾々は彼女等を犠牲にしたその者の血ぬられた手の持ち主（日本の天皇制絶対主義）の本質を追究し、見極めなければならぬのだ。単純なセンチメンタリズムは、そのものの本質を巧妙にかくしてしまうだろうし、追及の眼がそのために曇らされることがあってはならぬ[18]」。

また、「ひめゆり」人気は「清純な乙女の悲劇」として消費された側面も否めない。「渡嘉敷島における集団自決の悲劇が、沖縄では比較的に知られていたのに、本土でなかなかひろく語られなかったのは、ひめゆり部隊のように色気をともなわないせいであろうか[19]」。事実、映画の人気に便乗して五三年七月には、東京日比谷の宝塚劇場では菊田一夫脚本・演出によるグランド・レビュー『ひめゆりの塔』が上演され、石井みどり舞踊団はバレエ作品として公演している。凄惨な沖縄戦の記録は、娯楽へと変換されたのであった。

2　邦画界にとっての沖縄市場

だが、映画界における沖縄ブームは、ひめゆり学徒隊のアイドル化に負うだけでなく、占領下沖縄における映画事情にも関係している。そもそも映画界においてはいち早く沖縄がとりあげられていた。火野葦平原作の『赤道祭』（佐伯清監督）は一九五一年。これは沖縄女性をめぐる本土男性と沖縄出身男性の三角関係を描き、主な舞台は本土であるが、沖縄色の濃厚な物語である。『ひめゆりの塔』のヒットもあって、以後も沖縄ブームは継続し、以下のような映画が製作された。『ひめゆりの塔』公開の五三年は『沖縄健児隊』（岩間鶴男監督）、『健児の塔』（小杉勇監督）と沖縄戦物が続く。また、同年にはアナタハン事件を描く『アナタハンの真相はこれだ』（盛野二郎監督）の主演に、事件の当事者である沖縄女性を起用するなど沖縄への関心をうかがわせる。『ひめゆりの塔』の原作者石野径一郎が沖縄戦を描いた『残波岬の決闘』も同年に映画化されている。[20]

以後、本土復帰頃までの明確に沖縄を主題とする邦画を列挙すると、『椿説・弓張月』（一九五五年・丸根賛太郎監督）、『沖縄の民』（一九五六年・古川卓巳監督）、沖縄ロケを敢行した『海流』（一九五九年・堀内真直監督）、『太平洋戦争と姫ゆり部隊』（一九六二年・小森白監督）、『沖縄　記録映画』（一九六七年・黒沢剛監督）、『あゝひめゆりの塔』（一九六八年・枡田利雄監督）、『沖縄列島』（一九六九年・東陽一監督）、『沖縄』（一九七〇年・武田敦監督）、『激動の昭和史　沖縄決戦』（一九七一年・岡本喜八監督）と数多い。

沖縄物の隆盛を、本土側の関心のみで語ることはできない。沖縄市場が日本の映画会社にとってドル箱であったからである。先述のように沖縄の映画観客人口が多かったこともあり、フィルムは争奪戦で価格が高騰する。しかも、本土においては映画館と映画会社の配給系列が確立されフィルム代は歩合制であったのが、沖縄だけは買い上げ制であった。したがって映画会社はフィルムを売ってさえしまえば、興行成績に関係なく利益を得ることができたのである。[21] また、日本の映画会社にとって「外国」である沖縄へのフィルム輸出は、唯一のドル獲得

手段であった。このドルが洋画輸入の資金となる。かくして六〇年代には「本土の映画会社の沖縄ロケが一種の流行みたい」となった[22]。

「日本の」映画や情報に餓えていた沖縄人が熱狂的に迎えたからこそ、一九五一年以降、本土から俳優や芸能人そして文化人が沖縄を訪れるようになったのである。たとえば、渡辺はま子ら一行が公演に訪れ、松竹歌劇団もやってきた。また、俳優が映画上映時に舞台挨拶をすることもあり、一九五四年の年末、『金色夜叉』（島耕二監督）公開にあわせて山本富士子が来沖したときは大パニックとなる[23]。

映画作品を通じて、そして五一年以降は芸能人や文化人の訪沖という形で、本土と沖縄の交流が行なわれていた。だが、それは沖縄をドル箱として利用し、沖縄を消費する道筋でもあった。

3　「沖縄病」発生と「虚像の沖縄」

先述の一九五五年『朝日新聞』沖縄報道に話を戻す。この一連の報道は、本土で沖縄問題を提起する契機となりはしたが、その記事は記者が沖縄に赴くことなく執筆されたものであった。記事の根拠となった人権協会の調査報告も、調査員が沖縄を訪れずに書いたものである。記事を否定した米軍は内外の記者団を沖縄に招いている[24]。

沖縄への渡航自由化は六〇年。占領下の沖縄に行くには種痘や住民票による申請手続きで三週間から一カ月が必要であり、米軍の許可がいる。一九六〇年の沖縄来島者は二万人余りであった。しかし、この年早くも新聞紙上に「沖縄病」なる言葉が登場している。「近年沖縄を訪れたものが必ずといってよい位かかるのがこの沖縄病だ[25]」。即ち一般の観光客に先駆けて沖縄を訪れたマスコミ関係者、作家や文化人が罹患したと推測される。ちなみに当時の沖縄病とは、単なる沖縄好きの意ではなく、「沖縄の人にすまなかった、できるだけのことをしよう」と考え続けることであった。

ただ交流が密になることは、必ずしも本土側の沖縄理解が進むことを意味しなかった。新崎盛暉によれば、一九五六年頃から六〇年頃までは、「本土の新聞記事を丹念に読んでいけば、沖縄の動きは、あらかた理解できた。だが、それ以後は、本土の新聞や雑誌を読むだけでは、沖縄の動きをつかむことはまったく困難になった。多くの記者や、作家、評論家などが、かなり自由に沖縄に行くようになればなるほど、わたしたちは『虚像の沖縄』を与えられた[26]」。たとえば、六〇年代にはいってからの「沖縄現地報告」は、「島ぐるみ闘争の沖縄」というイメージを打ち消し、矛盾をはらみながらも「ドルの上に安住する沖縄」というイメージを流布したと指摘している[27]。

三　沖縄へ旅する人々

1　戦後の旅行事情

一九六四年に日本では観光目的の旅行が自由化され、海外旅行者は増大していく。一九七二年に海外渡航者が一〇〇万人をこえ、七〇年代は沖縄・離島への新婚旅行ブームといわれる[28]。とはいえ海外への壁は厚く、新婚旅行のメッカは、一九六五年以降一九七四年までは宮崎県であり、ハネムーン先の離島といえば奄美、種子島、徳之島、八丈島など国内であった[29]。初期に沖縄を訪れた人々は、仕事関係でなければ沖縄戦戦死者たちの遺族である。各都道府県が慰霊塔を建立したために、各地から遺族団が戦跡参拝に訪れた。映画『ひめゆりの塔』によって悲劇が全国に広まったこともあり、「ひめゆりの塔」も沖縄観光の目玉となる。

一九六〇年に摩文仁を訪れた田宮虎彦は、「戦記の一冊をでもよんだことのあるものには、南部をめぐることは観光などではあり得ない[30]」と述べたが、「沖縄旅行の最大のハイライトであり、魅力は何といっても、この南部の戦跡[31]」と宣伝され、田宮が「醜い」と評した乱立する慰霊塔は「余りの数多さに鬼哭啾々という感慨は巡る

ほどに薄れていく[32]。南部戦跡は自然の美しさもあって今日まで多数の観光客をひきよせているが、美しさのあまり、戦争の悲劇すらかすんでしまうとも言える。かくして一九七二年の南部戦跡は沖縄戦を知らない新婚カップルでにぎわうことになる[33]。

また、一九五八年に通貨がドルに切り替えられると、沖縄旅行には外国製品が安く買えるという新たな魅力が加わった。国際通りは「安い時計やカメラにさっとうする観光さんがこの辺をウロチョロ」、「夜になるとナイトクラブを始めダンナ方を満足させる施設がそこかしこにあって、四百ドルの交換制限額をわけなく費ってしまう大消費地帯である[34]」。

もう一つの魅力がアメリカ的な風景であった。「恐怖を感ずるよりも基地の絵のような美しさに目をうばわれる[35]」とあるように、旅で訪れた者には基地すらも観光スポットとなる。事実、「広大な米軍基地も沖縄観光コースの一つになっている[36]」と紹介され、占領に基因する風景――街を歩く米兵や英語の看板を掲げる多数の店も、旅人にとっては何ら脅威ではなく、心躍らせる「異国の風景」となる。つまり、復帰前の沖縄旅行のセールス・ポイントは、「海外」旅行の魅力と南部戦跡めぐりと免税ショッピングにあった。

しかし、「海外」ゆえの手続きの煩雑さは障壁となる。そこで売り出されたのが「沖縄セット旅行」である。「外国旅行の味がたのしめる……しかも、内地と同じように日本語が通じて、出入国の手続きさえなければ、内地を旅行する気易さと少しも違わないのが沖縄の魅力」であった。そして、出入国準備や旅行日程の作成という面倒を一挙に解決するのがセット旅行すなわち今のパッケージ・ツアーということになる。このセット旅行によって「今年の旅行界は、沖縄ブームに吹きまくられようというもの」と宣伝し「南国の風物、太平洋戦争の戦跡めぐり、外国製品のショッピング――沖縄には新しい特異な旅情が待っている[37]」と誘い込む。

実際に渡航制限緩和後は船旅の旅行者が増加し、「つい数年前、海外旅行の亜流くらいに思われていた沖縄旅

行がぐっと身近かな旅路となった」という。[38] 春休み夏休みの前後に沖縄を訪れる学生グループも多かった。[39] そして、六〇年代末には単なる「観光」目的ではない若者たちも現れる。彼らは、沖縄返還問題が全国民の問題としてクローズ・アップされたために、民族が分断された悲劇の島、太平洋戦争終焉の地という観点から、沖縄に対する関心と情熱をもって訪れるのである。[40]

新婚旅行で行く沖縄と、政治的関心から行く沖縄の並立。このように占領・復帰といった政治的関心を持つ者と、南の楽園へ憧れる者の二派に分離していくのが、復帰前の沖縄旅行であった。

2　沖縄を訪れる文化人たち

本項では、沖縄への観光旅行が一般化する以前、すなわち六〇年代半ばまでに沖縄を訪れた主な人々を、その著述とあわせて紹介する。火野葦平が日本航空の沖縄航路開通記念に招待されて沖縄を訪れたのが一九五四年。一九五九年二月には、『文藝春秋』が沖縄で文化講演会を初開催する。メンバーは、井上靖、村上元三、池島信平で、那覇・コザ・名護のいずれの会場も三千人を越える聴衆が集まった。[41] 既述のように、田宮虎彦の訪沖が一九六〇年。六一年には、またも『文藝春秋』が文化講演会を企画し、今東光、曽野綾子、中村光夫が沖縄に赴いている。[42]

沖縄について比較的執筆が多く、沖縄戦を題材とした小説作品もある田宮虎彦の訪沖体験を紹介しよう。沖縄の人たちは、本土の人間を指して「日本の人」と呼び、彼らが去ることを「日本に帰る」と言う。沖縄がパスポートを必要とする「外国」である以上、もっともな表現なのだが、滞在中頻繁に耳にするこうした表現に、田宮は「つきはなされたような気持で、その日本という言葉につまずいてしまった」と言い、「ここ沖縄もまた日本ではないのか。異様さは、同じ日本の人であるはずの人たちが、まるで外国人をよぶように私たちを日本の人と

よぶことから生じるのだ」と述べている。[43]

また日帰りで訪れた伊江島では島の人々の次のような言葉に胸をつかれる。「自分達は日本のために戦ったのに、戦争が終わってもう十五年もたつのに日本からは大臣の一人も見に来てくれない。皇太子夫妻がアメリカに行くというが、伊江島は無理としても帰りにせめて那覇まで来てくれたら」云々。「こうした言葉に政治的な匂いはかげもなかった。私には、置き忘れられた人たちの何かへのひたむきな祈りだけが痛いほどに感じられたのだ」。[44]

宮古島と石垣島では、飛行機のタラップを降りるや予想外の出迎えの人々に取り囲まれる。田宮が島を訪れた最初の小説家だったからである。田宮にとってそれは「意外な事実」であった。そして「『どうして、文芸講演会は、みな沖縄本島だけで帰ってしまうのですか、この次ぎはどなたか是非いっしょに連れて来てください』という声を聞きつづけ」、「置き忘れられたという感じは、……宮古、八重山の二群島までいくと、いっそう強烈に、私をつつんだ」と述懐する。[45] 田宮が初めてだったとはいえ、この六〇年以降は離島を訪れる文化人も珍しくはなく、北杜夫も六〇年に西表島と与那国島にまで足を延ばしている。[46]

文化講演会で沖縄を訪れた今東光も、沖縄の女性たちが、「殆ど口を一つにして、三カ月ほど滞在して沖縄のことを書いてくれと言う」[47]と述べている。本土の人々に沖縄を理解してもらいたいという切実な願望ゆえであろう。

ただし、訪れた作家たちが必ずしも、沖縄人の望むように沖縄を描くわけではない。前章で触れた新崎の指摘「ドルの上に安住する沖縄」像がふりまかれる。今東光も「ひでえ図は金網が二つの世界を区別しているのだ。金網の内部は美しい芝生が青々と生え、きらめくような家が立ち並び」と言いながら、「軍事基地の戦略戦術的価値が喪失するのを待っていれば、そっくりそのまま後が使えるのだ。何も大騒ぎするほどのことはない」として、「沖縄のように経済の弱体なところではアメリカ軍の進出ということは決して帳尻の合わないものではない

筈だ」と米軍占領を肯定的に捉えている。[48]

著名人でなくとも教育や調査のために沖縄を訪れる教育者・識者は多い。彼らもまた、六〇年代に入り、そこそこ発展してきた沖縄の現状を見て、むしろ米国統治の恩恵に注目するのだ。たとえば、琉球大学を見て、「近代的高層建築は偉観……本土の多くの大学とは比較にならないほどりっぱ」で「まったく米国流の運営」、「最もうらやましく思ったのは学生寮の完備」[49]としている。旅行ガイドブックも「基地にはさまざまの問題がある。しかし沖縄はそのためになりたっている」として、土地の強制接収の事実に触れながら、土地代は支払われ、基地で仕事も得ているとして、それほど困っていないと述べている。[50]

六〇年代半ばから本土復帰にかけても文化人の訪沖は続く。一九七〇年には田宮虎彦が沖縄を再訪し、すっかり変わったことに驚く。「沖縄戦史が悲惨なのは、日本軍が敗けたからではなかった。非戦闘員に死を強いたからである。この差違を間違えてはならないし、忘れてはならない」と考える田宮は、沖縄をアメリカにゆだね基地化することと引き換えに本土が講和条約を結んだのに「今頃になって施政権復帰を政治的未曾有の大功績だと強調するような政治家、安易に復帰に万歳を叫ぶ日本人の感覚は、神は決して許さないであろう」[51]と憤る。

吉村昭も沖縄戦を背景にした小説執筆のため、一九六八年沖縄への船旅をする。沖縄本島が眼前に見えてきた時、戦闘機の群れが沖縄本島に帰還していくのを目撃し、「沖縄の現実が、私の胸をしめつけた」[52]と書いている。彼らに共通するのは、沖縄戦に対する罪責感や米軍占領に対する同情や負い目の存在である。

3　楽園享受型文化人の登場

仕事でなしに沖縄を訪れたのが上坂冬子である。彼女は一九六七年から六八年の年末年始に沖縄団体旅行に参加した。格安ツアーに惹かれて来たものの、沖縄戦と米軍基地という二重の悲劇を意識せざるをえない上坂は、

亜熱帯の緑を見ても「同じ緑でも何となく貧しい色だ」と思うし、屋根の上のシーサーも「戦争中は激戦の場となり、戦後は基地の町としていけにえ的な存在で今日に至ったその悲劇の地に、魔除けが目立つのは何ともあわれっぽい」と感じてしまう。大晦日に熱心にしめなわを売る小学生の子供と祖母の姿に胸をつかれ、市場を見れば「店構えも、店内装飾もあったもんじゃない。必要なものを売る最低の条件のみの風景」と思う。決して馬鹿にしているのではなく、地元客と一緒に銭湯に入り、現地の人と直に触れあおうとしている。[53]

ところが他の団体旅行の客たちは上坂のような感覚の持ち主ばかりではない。旅行日程では二日はひめゆりの塔見学、三日は基地見学となっていた。正月気分で出かけてきた一行百人は平気で戦闘機にカメラを向け、拘置されてしまうと慌てて止めるバスガイドに、ひっぱられたらかえって面白いと笑って頓着しない。女性客は「基地だの戦争の跡だの見るだけじゃつまんない」と自由行動に出てしまう。上坂は、この時購入した琉球漆器を取り出すたびに「ゲラゲラと笑う内地の客たちを前に、うろたえていたバスガイド嬢の顔がうかび、そして次に、大晦日の夜にしめなわを売りさばいていた少年の表情が思い出され何となく後めたい、割りきれない思いがわくのである。紺碧の海、緑の島というふれ込みとは別に、少なくとも沖縄は私にとって胸にひっかかりを残す土地であった。そして、胸にひっかかりが残ったが故に、私には、あの沖縄の旅が今でも忘れられない味わいをもっているのである」という。[54]

「海外旅行のムードが手軽に味わえ」て「舶来品が非常に安く買え、ちょっとした異国情緒があじわえる土地、ということが魅力[55]」で訪れる客は、なぜ「異国」なのかを問うことなく、その雰囲気を享受しようとする。こうしたスタンスは一般の観光客だけではない。戦争や米軍占領と基地という「負の遺産」を全く意識せずに訪沖する文化人たちが登場する。

たとえば六六年に『旅』誌特派として与論島、徳之島を訪れていた人気作家森村桂が沖縄へ行くのが一九六九

年の一〇月である。琉球新報社からの講演依頼であった。依頼を受けた森村は大喜びする。「なんて私は運がいいんだろう。行けるのだ。今年も外国へ行けるのだ」[56]。ややおいて沖縄は外国ではないことに気づくものの、「言葉はいったい日本語なんだろうか、すごい方言で聞きとれないだろうか、それともアメリカの学校に行ってるんだろうか」[57]という程度の知識しかない。佐藤首相の欧米阻止運動についても「二つに分れた日本を、一つにもどそうとしに国の首相が行くのに、どうして学生たちはそんなに反対しているのだろう」[58]と思うほどの政治的無知である。本土で著名な人であれば何でもありがたがって招請する――ここにも本土と沖縄との片務的関係を見ることができよう。

沖縄の人々との交流によって森村はアメリカ支配の現実や楽園の裏側にあるものを見ざるをえなくなるのだが、それでもアメリカ製の冷蔵庫が格安と聞けば「ついついさっきの占領下の悲しみなんてものはどっかへ小っちゃくなって、等身大の冷凍冷蔵庫のある生活なんていうのに、あこがれてしまう」[59]し、日本の半額以下で買えるアメリカ製のクッキーやチョコレートに目の色を変える[60]。

森村を最も喜ばせたのが竹富島の浜で、「天国に一番近い島」ニューカレドニアから帰って五年、同じような浜が日本にないかと探し歩いたはてに竹富島にそれを見出したのである。しかも、「私の知ってる日本中でいちばん美しい浜」を、三年以内に別荘を建て浜を美化するという条件で永久貸与する、と村会議員に約束されて舞い上がる[61]。

ちなみに岡部伊都子はその前年に竹富島を訪れて土地を購入している。別荘を建てたら「私は、土人服をヒラヒラさせて、ダンナさまも、もちろん、はだかに、赤か黄色の腰布、足ははだしだ」などと考え、「あの浜に行けば、誰でも南太平洋の土人のようにゆったりとした気持になれる」[62]という森村に悪意がないのは分かるが、自分の楽園イメージを一方的に押し付けるものでしかない。

ムツゴローこと畑正憲は石垣島に行き「勘定も安いし、まったくのんびりくつろげる。酒の好きな人には、石垣市のバーやキャバレーは天国であろう」と述べ、釣りを楽しんでおいて「南海の魚はどれも非常にまずい」、「魚ばかりか、イセエビや貝類も味が落ちる。……南の島は食べ物より、燃える太陽が御馳走である」と、ならば釣るなと言いたくなるような言いぐさである。[63] 訪れる人の少なかった離島は、いざ足を延ばす人が出れば出たで、米軍基地がなく戦跡もないために、脳天気な楽園幻想をばらまくことになったともいえる。

四　増大する沖縄報道と沖縄へのまなざし

1　硬派の沖縄報道

復帰を目前にして本土のメディアでは沖縄報道が過熱する。『朝日新聞』は一九六九年五月一八日から通算一〇〇回の『沖縄報告』を掲載した。「長い知識の空白を埋めるのは新聞として当然の責務」で「もっと早目に、読者に沖縄のありのままを伝えるべきであったのを、しなかった。その償いの機会でもあろう」というのが動機である。[64]「一九六九年の『四・二八』大衆行動は、沖縄、本土とも高まりをみせた。しかし沖縄の新聞社の東京特派員はほとんど、本土の運動に沖縄への認識が足りないこと、互いに連帯感が欠けていることを報じた[65]」。「沖縄返還交渉が現実の日程に上りつつあるいま、人々の気持には、解放への希望と変革への不安が同居し始めている。それに、戦前から差別を受けてきた本土に対する感情、戦後派の若い世代の思想もからむ。盛上がる一途の復帰運動も、その内部では統一と分極化の軸が複雑に交錯し始めた。米国の統治も、基地も、沖縄の人が自分の手で導きいれたものではない。にもかかわらず、島は痛み、傷ついている。こうした『島ちゃび』（島の苦しみ）を理解せずに、真の復帰はありえないだろう。われわれ沖縄取材班は、まずどこを歩いても目に刺さる『祖国の

中の異国』の現実を、そのまま報告することから出発し、『内なる沖縄』に迫りたい[66]」。

一方、『世界』は『朝日新聞』に先立つ一九六八年一〇月号から一九七二年十二月までに連載ルポ三四編を掲載した。「長い戦後の期間における知識人の沖縄意識の欠落をとりもどそうとするかのように、類別なく、持続して、多角的に沖縄に迫ろうとする努力をつづけたのだった[67]」。つまり「この時期ほど日本の矛盾の凝縮点という意味あいもふくめて、沖縄の事態とのかかわりあいをもとめようとする人々が、本土において出現したことはなかった[68]」のである。

しかし、「近ごろは本土からいろいろな人が沖縄に来る。しかし多くの人々は沖縄に対して冷淡で傍観者的です。自分達の責任はタナにあげて、復帰、基地、経済などの問題について、沖縄県民はどうするつもりなのかと聞く。これが沖縄を二四年間も放ってきた同胞の態度なのか……。私はいきどおりさえ感じる」という沖縄側の声もあった[69]。

2　大衆誌の沖縄報道——売春への注目

ところで先述の五五年『朝日新聞』沖縄報道に呼応するかのように、一九五五年は週刊誌やその他の雑誌でも沖縄報道が急増する。たとえば、「特派記者のメモ〝嘆きの島〟オキナワ」（『サンデー毎日』五月一日）、「東洋の孤児・沖縄」（『週刊サンケイ』五月一日）、「現地ルポ　悲劇の島沖縄」（『経済往来』六月号）など、沖縄のおかれた悲惨な状況へ注目が集まった。

その一方で、「売春防止法のない島」として、沖縄売春事情が五〇年代後半から復帰にかけて盛んにとりあげられる。「沖縄に転進する夜の女　笑われた日本唯一の公娼容認地区」（『週刊サンケイ』一九五八年一月十二日）によると、内地では一九五八年三月をもって赤線地帯が終焉したので「売春防止法の適用のない沖縄が、がぜんク

ローズ・アップされてくる」として、日本から密航する売春婦や業者の増加を述べている。

他にも「世界犯罪ストーリー　情無用の二十七度線　沖縄闇航路の売春婦たち」（『週刊サンケイ別冊』一九五八年五月二五日）、「野放し・夜のオキナワ　那覇の歓楽街を往く」（『週刊サンケイ別冊』一九六〇年一月）「基地オキナワ夜の無法地帯　特殊女性2万人」（『週刊サンケイ別冊』一九六〇年九月）「米兵に肉体をひさぐ『基地の女』」（『週刊大衆』一九六八年三月七日）といった記事がある。

この手の記事は取材する記者も案内する沖縄人も男性で、結果、社会問題という観点よりも、興味本位ないしは客ともなりうる男性読者を楽しませる内容となりがちであった。たとえば前掲「野放し・夜のオキナワ　那覇の歓楽街を往く」では、記者に同伴するのは琉球新報社長の長男と沖縄テレビの専務であった。その専務は、米軍相手のバー・キャバレー街となった辻について、戦前の辻を「それはもうよき古い時代」で「娼婦も娼家も、実にのんびり」として時間制とか泊まりといったシステムはなく「一日でも二日でもいつづけ」であったとうっとり、「昔を懐かしむような目」で語っている。

女性を買うのが米兵だけでなかったことは「沖縄・もう一つの現実〝観光売春〟に生きる女たちの群れ……」（『週刊朝日』一九六九年一月二四日）に明らかである。実際、当時の旅行雑誌やガイドブックは、男性を対象とした歓楽案内掲載がお約束であった。「青線的営業を堂々と行なうバー街がある」、「米人が多いので、アメリカムードのいい店が少くない」[70]。バー、キャバレーは内地よりかなり安上がりとして、市内の夜遊びは若い男性にとって相当楽しめるという記事もある[71]。一九六三年版の『沖縄［ブルーガイドブックス44］』は、「いたるところにセックス地帯がある」として、コザ吉原などの歓楽街を紹介し、一晩泊まって五ドルから六ドル等料金相場まで紹介している。また、娼婦の数は公称三万人だが、成人女性の二・三人に一人が売春婦、もしくは類似行為に及ぶという事情なので実際には十万人という記事もある[72]。

そして、この類の記事が売春を悲劇・悲惨とは捉えないのは、客を誘引するうえで当然のなりゆきだが、さらにエスカレートして、「幸か不幸か、ここでブレーキをかけるべき性倫理が、沖縄には伝統的に存在しない。……沖縄こそは神世の昔からのセックス解放区」として、沖縄女性が元来性的に奔放であるがゆえに明るく簡単に売春に走るかのような記述も現れる。こうした言説を裏付けるために沖縄の伝統「毛遊び」までが動員され、「貧乏で、両親とも働きに出ているから、欠損家庭で、おまけに伝説的なモアシュビ精神とくれば、女の子が〝モトシンカカランヌー〟[73]に走ったとしても当たり前の話」としてしまう。[74]性に開放的な女性達が売春に罪悪感をもたず、元手いらずの商売と考えているならば、「買う側」も罪悪感をもたずにすむというわけだ。

この延長に海洋博ブームに沸く一九七五年、テレビ番組「11PM」の「沖縄最新プレイゾーン情報」事件がおこる。これは、沖縄は男性三〇〇人に一件の割で風俗営業があり、男性天国であるとした番組が沖縄で放送され、視聴者の反発を買い、新聞に抗議の投書が殺到、司会の大橋巨泉が次回の番組で謝罪した件である。[75]

売春防止法が施行されたからといって本土でその手のビジネスが消滅したわけでもないのに、沖縄を法の埒外として、ことさら売春産業の隆盛が強調されることによって、本土とは違う「特殊な」沖縄像がたちあがる。

そして、俗っぽい週刊誌においては、沖縄本土復帰すなわち売春婦の失業問題となる。たとえば「沖縄1万5千人の売春婦はどうなる」(『週刊ポスト』一九七一年三月一二日)、「帰ってくる沖縄を考える　ある娼婦の記録」(『週刊プレイボーイ』一九七一年九月二八日)、「どこへゆくモトシンカカランヌー　沖縄の売春リポート」(『サンデー毎日』一九七二年一月二日)、「それでも復帰できないコザ〝売春地帯〟の女たち」(『週刊文春』一九七二年四月一七日)「返還を怒る沖縄赤線1万5千人の女たち」(『アサヒ芸能』一九七二年五月一八日)といった記事がある。確かに本土復帰によって、米軍・米兵相手の仕事に従事していた人々(もちろん売春婦だけではない)に深刻な失業をもたらす側面はある。ただ、注意しなければならないのは、復帰を失業・経済問題としてとらえる発想は、基地

の恩恵を暗黙に認め、沖縄の基地依存を当然視することでもある。そして、売春問題がクローズ・アップされたのは、「ひめゆり」と同様「色気をともなう」事柄であったからであろう。関心の焦点はまたしても「沖縄の女性」であったともいえる。

3　本土復帰と南沙織と楽園化

一九六〇年代に沖縄への旅が一般化しつつあった頃、戦跡は必須の観光ポイントであり、旅行雑誌の記事やガイドブックも、多くのページを戦跡に割いていた。

> 数万の生命の血を吸った大地には樹木も生えそろわないのであろうか。まさに荒涼たる大地、石まじりの土には農作物もよく育たない。その中で懸命に土を耕す農夫たちの姿を見ると、戦争の残酷さをしみじみと感ぜざるを得ない。そして沖縄をこのような地にしてしまったことに、激しい憤りを感ぜざるを得ない。
>
> あちこち掘りおこすと、無数の戦死者の遺骨がでてくる。……不発弾も相当ある。
>
> 那覇から夜になって、タクシーで南部に行こうとすると、ことわられる場合が多い。気持が悪くて行く気にならないのだそうである。南部は幽鬼の地である。(76)

これらの文章は一九六三年の沖縄ガイドブックである。この本では、南部を「もっとも凄惨な、もっとも残酷な戦場であった」と紹介し、「南部は現在でもなお立ち上れない」と述べている。こんな凄惨な旅行ガイドがあ

るかと思われるかもしれないが、同年の交通公社沖縄セット旅行の紹介記事も似たようなものである。南部戦跡とは「同胞21万の血を吸った広大な墓地」であり、「戦跡めぐりというが、激戦の跡や同胞悲運の地を観光地視してはならない」と書かれている。[77]

レジャー気分を削ぐような描写は、沖縄以外についても見られる。たとえば、「日本最南端」として六〇年代に注目された与論島についても、本土復帰の時だけ関心を集めたが「時のたつのにしたがってまた忘れ去られそうな島」、「文化果つる島　栄養失調の島民」、「島民の生活はあまりにも、惨め」などと書かれている。[78] これでは「神秘なコバルト色の島・与論島」といっても、旅情をそそらないのではないだろうか。

思うに戦後初期の旅行雑誌やガイド本は、単なる旅のハウツー紹介ではなく、読み物としての機能をもっていたのではないだろうか。雑誌に紹介されたからといって、今ほど簡単に多くの人が旅に行ける時代ではなかった。したがって、記事内容も旅行情報にとどまらず、その土地についての歴史や政治・社会状況の概説が記載されることになった。

しかし旅行が一般化し、広範な多数の人々を客として獲得する必要に迫られるようになると、暗い戦争の傷あとを描写した旅行ガイドの類も、次第にその論調を変えていく。六〇年代も後半になると「旅情を語るにしても、沖縄の場合は第二次世界大戦や米軍基地問題から復帰問題など内外の政治や戦争のことを切り離すわけにはいかない」と一応しながら、人それぞれ思考の違いがあるから、「ここではやはり沖縄の風物に視点を定めなければなるまい」[79]と、歴史や政治問題を回避するようになる。

それは、復帰後の沖縄が「海外」でなくなり、戦跡は若者にアピールしないから観光地としての将来が危ぶまれると判断した旅行業界の戦略でもあった。[80] 海外と戦跡に代わって売り出されたのが、「青い空と海」の「南の島」である。

また、復帰前の七〇年に大々的に展開された「ディスカバー・ジャパン」キャンペーンの対象は独身女性であり、女性へのアピールが観光地としての成否を握ることであった。事実、同じ七〇年に創刊された女性雑誌『anan』と翌年創刊の『nonno』は、旅行記事を掲載し、その旅行情報に頼って旅する大量の若い女性を生み出し、「アンノン族」と呼ばれ、社会現象となった[81]。若い女性に人気のあった森村桂は、南国リゾートを楽しむ女性の先駆けであったといえる。ただし、『anan』の沖縄記事初出は、一九七三年六月、『nonno』は七四年一一月と、男性誌や一般週刊誌のような復帰前ブームは見受けられず、また、復帰後も沖縄が取りあげられることは、さほど多くはない。

女性向け旅行雑誌には次のような旅行情報が提示された。「ギラギラと照りつける太陽と吸いこまれてしまいそうに青い青い空。それが沖縄の夏」。離島については、竹富島は「単純素朴という言葉がピッタリ」で「俗っぽいものいっさいなし」。石垣島は「おおらかなムード」で「闘牛を日がな一日大のおとなが見物していて普通なのです」。南部といえば「たくましい海の男がいっぱいいる」糸満であり、戦跡はどこへやら。あとは那覇市やコザ市でのお買い物の推奨となる[82]。

かくして旅行客は一九七一年に二〇万人を突破、復帰の七二年には各社が復帰記念ツアーを組み、入域客は四四万人となる。そして一九七五年の沖縄海洋博では観光客一五五万八千人を動員し、次いで一九七七年のＡＮＡ・ＪＡＬ沖縄キャンペーンで「沖縄ブーム」を起こし、七八年には観光客一五〇万人にせまる[83]。

沖縄は「昭和50年の海洋博覧会の開催とともに、日本国民の間に『南海の楽園』と印象づけられ、最近ではビーチ観光のメッカになりつつある。それは多くの宣伝機関がビキニ・スタイルの美女を浜辺で泳がせたり、あるいは日本のハワイとしてトロピカル・ムードを売りこんだためであろう[84]」。そして、今日に至っている。

さて、復帰直前は、沖縄旅行ブームであると同時に、沖縄が政治的争点として多大な関心を集めてもいた。硬

軟とりまぜての沖縄情報が噴出するさなかの一九七一年、歌手南沙織がデビューする。「沖縄の女の子」として売り出され、デビュー曲が大ヒットし、その年の歌謡大賞を総なめにしＮＨＫの紅白歌合戦出場と、瞬く間にスターダムを駆け上った。当時、もっとも大衆的な沖縄表象は南沙織だったのではないだろうか。いや、沖縄ブームであったからこそ南沙織がブレイクしたともいえる。長い黒髪と小麦色の肌は、「南国の楽園」を体現するものであった。

本土の他の地域出身であれば考えられないほど、南沙織は「沖縄出身」と喧伝され、実際に南沙織は「沖縄代表」のように扱われた。たとえば、自民党のポスター「沖縄をあたたかく迎えよう。自民党」には南沙織のアップが登場し、七二年の沖縄復帰時には国の記念式典に参加している。

だが、南沙織は単に居住地が沖縄であったというだけで、父はフィリピン人、母は奄美出身で沖縄人の血をひくわけではない。本土デビュー前は、シンシア・ポーリーという本名でアメリカン・スクールに通い英語で生活していたので、日本語は不自由で漢字は読めなかった。南沙織は、沖縄アイドルとして捏造されたともいえる。[85] 沖縄のテレビ番組やＣＭに出演していたシンシア・ポーリーが、本土で「沖縄人」南沙織となったことに、沖縄の人々は違和感を覚えたのではないだろうか。

「沖縄へ対する内地の目というものが、南沙織を通して、はっきりと出てしまったのですね。沖縄にいささかでも関連があれば、なにがなんでも沖縄娘ということで売りこんでしまう」と看破した嵐山光三郎の次の指摘は、今日の沖縄ブームにもあてはまる。

「南沙織が、沖縄ブームとやらで人気を得たのは、彼女が、沖縄の少女のくせに（実際はそうでもないのだが）沖縄の悲しさや苦しみをひとかけらも持ちあわせていなかったからだ、という構造を、くれぐれもおわすれなく」。[86]

おわりに

戦後最初に大衆レベルで流布した沖縄表象は「ひめゆり」であったといえる。国家に殉じた「純潔な」乙女たちが体現したのは、健気で純粋な、しかも与えられた困難な運命に立ちむかう能動的な女性である。「女性の悲劇」であるがゆえに愛され共感を呼ぶ一方で、悲惨な事実は、若い女性が主役であるがゆえに「美しい死」として享受された。

次なる沖縄表象としてここでは売春婦をあげたい。好色的な記事の中ですら、彼女たちは、困難な時代をたくましく生きぬく生命力あふれる存在として描かれている。それもやはり、好まれる「女性像」ではないだろうか。そして、やはり「女性の悲劇」なのである。

ひめゆり学徒と売春婦、両者は対照的なようで酷似している。どちらも過酷な運命にたいして懸命に対処するが、自らに課せられた困難の理不尽さと根源を問うことはなく、そういう意味では受け身なのである。

どちらも、声高な批判や責任追及をしない存在であるがゆえに、本土側が安心して受け入れることができた。彼女らの悲劇、彼女らを「そうさせた」主体・原因は不問にしたまま、同情や共感をよせることができるのである。少なくとも多くの日本人は、そこに自らの責任を意識することなく、だからこそ心地よくそれらの表象を味わうことができたのであった。

そして第三の沖縄表象である南沙織は、表象自体が都合のよいすりかえで成立していたといえる。沖縄が本土復帰する頃、沖縄は「悲劇」から離脱し、エキゾチックな「南の楽園」として享受されつつあった。いや、過去の悲劇など楽園幻想には邪魔なだけだ。だからこそ、沖縄戦の犠牲に無縁で、基地の恩恵に浴す（彼女の父は米軍軍属であり、アメリカン・スクールに通うのも普通の沖縄人にはかなわない特権であった）少女が、沖縄出身として

売り出され、もてはやされたのだ。

（1）拙論「楽園幻想の起源を求めて――①火野葦平が愛した琉球――」『琉球大学政策科学・国際関係論集』（二〇〇五年三月）及び「明治の沖縄観――菊池幽芳と志賀重昂を手がかりとして」『政治思想研究』（第八号、二〇〇八年）、参照。

（2）フランク・ギブニイ「沖縄――忘れられた島――」（タイム誌一九四九年一一月二八日掲載記事）『琉球史料第一集』琉球政府文教局、一九五六年、二五六―二五七頁。

（3）南方同胞援護会編『追補版　沖縄問題基本資料集』（南方同胞援護会、一九七二年）一六四頁。

（4）「沖縄報告書」（『法律時報臨時増刊』一九六八年三月）、二二六頁。

（5）平野共余子『天皇と接吻　アメリカ占領下の日本映画検閲』（草思社、一九九八年）、五九―六〇頁。

（6）門奈直樹『アメリカ占領時代――沖縄言論統制史』（雄山閣、一九九六年）、七四―七七頁。

（7）歌舞伎の場合、占領軍が禁ずる封建的な忠義や自己犠牲、仇討ちを描く作品が大多数のため、古典的名作の多くが上演不能となり、上演作品の三〇％以上を新作脚本とせよ、という命令も出された（永山武臣監修『松竹百年史』松竹、一九九六年、二四八頁）。

（8）前掲『天皇と接吻　アメリカ占領下の日本映画検閲』、六〇―六四頁。

（9）同書、六八―六九頁。

（10）原爆映画への介入については　同書及び、阿部・マーク・ノーネス「中心にある固まり――『広島・長崎における原子爆弾の効果――』」（ミック・ブロデリック編著『ヒバクシャ・シネマ』現代書館、一九九九年所収）を参照。

（11）前掲『天皇と接吻　アメリカ占領下の日本映画検閲』、一〇二―一〇五頁。

（12）同書、八四―八九頁。

（13）前掲『アメリカ占領時代――沖縄言論統制史』七四―七七頁。

(14) 山里将人『アンタヤサ！　沖縄・戦後の映画　1945―1955』（ニライ社、二〇〇一年）、一九―二〇頁、二五―二六頁、三〇―三二頁。
(15) 黒田嘉一郎『沖縄紀行』（真珠書院、一九六四年）、一四頁。
(16) 宮里政弦『アメリカの沖縄統治』（岩波書店、一九六六年）、九一頁。
(17) 五〇年代の原爆映画には本文で挙げた他に、以下の作品がある。『蜂の巣の子供たち』（一九四八年・清水宏監督）、『原爆の図』（一九五二年、今井正監督）、『原爆の子』（一九五二年・新藤兼人監督）、『長崎の歌は忘れじ』（一九五二年・田坂具隆監督）、『ひろしま』（一九五三年・関川秀雄監督）、『長崎の子』（一九五七年・木村荘十二監督）、『生きものの記録』（一九五五年、黒澤明監督）、『生きていてよかった』（一九五六年、亀井文夫監督）、『世界は恐怖する』（一九五七年・亀井文夫監督）、『純愛物語』（一九五七年・今井正監督）、『千羽鶴』（一九五八年・木村荘十二監督）、『ヒロシマの声』（一九五九年、亀井文夫監督）。
(18) 新川明「戦後沖縄文学批判ノート――新世代が希むもの――」（『沖縄文学全集第17巻評論Ⅰ』国書刊行会、一九九二年、所収）、八九―九〇頁。
(19) 大城立裕「私のなかの神島」（劇団青俳第22回公演プログラム『神島』一九六九年、（『沖縄演劇の魅力』沖縄タイムス社、一九九〇年、所収）、七二頁。
(20) 映画に先行するのが出版物の沖縄戦記であり、古川成美『沖縄の最後』（一九四七年）、『死生の門』（一九四九年）、宮永次雄『沖縄俘虜記』、大田昌秀『鉄の暴風』（一九五〇年）、そして石野径一郎『ひめゆりの塔』（一九五〇年）が出版されていた。
(21) 前掲『アンタヤサ！　沖縄・戦後の映画　1945―1955』、一一六頁。
(22) 辻村明・大田昌秀『沖縄の言論――新聞と放送――』（南方同胞援護会、一九六六年）、一九九頁。
(23) 前掲『アンタヤサ！　沖縄・戦後の映画　1945―1955』、一九四―一九五頁。
(24) 前掲『アメリカ占領時代――沖縄言論統制史』一七三―一七四頁。中野好夫・新崎盛暉『沖縄問題二十年』（岩波新書、一九六五年）六六―六七頁。
(25) 「きのうきょう」欄、『朝日新聞』一九六〇年三月一日。
(26) 前掲『沖縄問題二十年』二〇三頁。

(27) 同書、一九八頁。
(28) 鵜飼正樹他『戦後日本の大衆文化』（昭和堂、二〇〇〇年）、二五二―二五四頁。
(29) 白幡洋三郎『旅行ノススメ　昭和が生んだ庶民の「新文化」』（中公新書、一九九六年）、一七六―一七八頁、一八四―一八五頁。
(30) 田宮虎彦「見てきたばかりの沖縄の素顔」（『旅』一九六〇年九月）。
(31) 「沖縄エメラルド旅行」（『旅』一九六六年四月）。
(32) 「蒼海の南国・沖縄」（『旅』一九六八年六月）。
(33) 「グラビア・オキナワのカップル」（『旅行読売』一九七二年九月）。
(34) おおば比呂司「沖縄駆足拝見！」（『旅』一九六一年一二月）。
(35) 富田裕行『沖縄［ブルーガイドブックス44］』（実業之日本社、一九六三年版）、一一六頁。
(36) 前掲「蒼海の南国・沖縄」。
(37) 「沖縄セット旅行　沖縄の旅4泊5日」（『旅』一九六三年四月号）。
(38) 前掲「蒼海の南国・沖縄」。
(39) 「特集・観光船のすべて！　国内航路から外国航路まで」『旅行読売』一九六七年六月号。
(40) 前掲「蒼海の南国・沖縄」。
(41) 「座談――沖縄で見たこと感じたこと――」（『文藝春秋』一九五九年四月号）。
(42) 今東光「沖縄の厨子瓶――沖縄地方文化講演会でみた強烈な印象――」（『文藝春秋』一九六一年五月）。
(43) 田宮虎彦「沖縄の中の日本人」（『サンデー毎日』一九六〇年八月七日）。
(44) 同右。
(45) 同右。
(46) 北杜夫「土人の神様（アタオコロイノチ）沖縄にゆく」『週刊公論』一九六〇年九月六日。
(47) 前掲「沖縄の厨子瓶――沖縄地方文化講演会でみた強烈な印象――」。

(48) 同右。
(49) 前掲『沖縄紀行』七六―七七頁。
(50) 前掲『沖縄［ブルーガイドブックス44］』、一一〇頁、一一七頁。
(51) 田宮虎彦「変わらざる沖縄・変わりはてた沖縄〈私の愛する旅路9〉」（『旅』一九七〇年一一月）。
(52) 吉村昭「沖縄への船旅・船上の旅情」（『旅』一九七一年二月）。
(53) 上坂冬子「沖縄一週間・団体のなかの個人」（『旅』一九七一年二月）。
(54) 同右。
(55) 前掲「蒼海の南国・沖縄」。
(56) 森村桂『森村桂沖縄へ行く』（講談社、一九七〇年）、八頁。
(57) 同書、一三頁。
(58) 同書、一〇頁。
(59) 同書、二三頁。
(60) 同書、五四頁。
(61) 同書、一一九―一二一頁。
(62) 森村桂「別荘にしたかった竹富島」（『旅』一九七一年二月）。
(63) 畑正憲「処女地の海釣り・先島諸島」（『旅』一九七一年二月）。
(64) 一柳東一郎「あとがき」朝日新聞社編『沖縄報告　復帰前1969年』（朝日文庫、一九九六年）、三二九―三三〇頁。
(65) 同書、一一頁。
(66) 同書、一二―三頁。
(67) 福木詮「あとがき」『沖縄のあしおと　1968―72年』（岩波書店、一九七三年）、五九一頁。
(68) 同右。
(69) 前掲『沖縄報告　復帰前1969年』一〇―一一頁。

(70)「沖縄セット旅行」(『旅』一九六三年四月)。
(71)前掲「沖縄エメラルド旅行」。
(72)「現地ルポ　沖縄の〝女たち〟の暗いSEX」(『週刊プレイボーイ』一九七一年八月一〇日)。
(73)モトシンカカランヌーとは、元手いらずの意味で、身体一つで始められる売春業を指す。
(74)前掲「現地ルポ　沖縄の〝女たち〟の暗いSEX」。
(75)「沖縄県民が怒った〝海洋博記念番組〟」(『週刊サンケイ』一九七五年八月七日)。
(76)前掲『沖縄［ブルーガイドブックス44］』八五―八六頁。
(77)前掲「沖縄セット旅行」。
(78)稲見輝男「神秘なコバルト色の島・与論島」(『旅』一九六〇年四月)。
(79)前掲「蒼海の南国・沖縄」。
(80)『日本交通公社七十年史』(日本交通公社社史編纂室、一九八二年)。
(81)前掲『旅行ノススメ　昭和が生んだ庶民の「新文化」』、七九―八二頁。
(82)『るるぶ』一九七四年夏号。
(83)前掲『日本交通公社七十年史』、石川政秀『沖縄の観光産業』(沖縄観光速報社、一九七四年)、参照。
(84)前掲『沖縄の観光産業』、三頁。
(85)本土復帰の翌年、またまた沖縄出身のフィンガー5が一世を風靡するが、これについては別途検討したい。
(86)嵐山光三郎「『潮風のメロディー』　沖縄の苦しみ悲しみはひとかけもなく(現代歌情26)」(『朝日ジャーナル』一九七二年一月二一日)。